

社会科学の「科学性」

—アルチュセールに関連して—

河野 健 二

I

「手から口へ」という言葉があるが、その意味は手でつかんだものをすぐ口へ運んで食べるということ、つまり、一方では原始的な採取経済のもとでの人間のあり方、他方ではそれと似ているが窮乏生活を送らざるをえない人間のあり方がそこに示されているのであろう。

ところで「手から口へ」という人間の在り方は、単に食物や生活必需品について当てはまるだけではなくて、文化や知的生産物についても妥当するであろう。例えば、ある種の工業生産の技術が自国の内部で発明されたり工夫されたりする過程を通すことなしに、完成したものがいきなり外国から持ち込まれ、適用される場合、その持ち込みや適用に当たっていくばくかの反対や抵抗があったとしても、その国はある種の工業技術について「手から口へ」という在り方を採っていることになるだろう。

工業技術の例はまだわかりやすいが、もっと判りにくいケースもある。社会科学の場合はどうであろうか。わが国の社会科学の在り方を考えるとき、私はやはりこの「手から口へ」という比喩があてはまるように思う。それはわが国の社会科学が「輸入科学」であることを指摘するためではない。それはわかりきったことだし、自然科学の場合も元来は「輸入科学」でしかなかった。社会科学にとっての問題は、輸入されて以後、それがわが国の土壌の上で出会った運命の特殊性にある。社会科学はまず第一に「科学」としての共通性を剥ぎとられ、あるいは無視されて、もっぱらそのイデオロギー性において存在するも

のとして扱われてきた。したがって、それは政府的であると反政府的であるとを問わず政治目的と容易に結びつく存在に終始した。一定の政治目的、たとえば国家主義の強化を正当化する経済学、あるいは反体制の革命運動を正当化するためのマルクス主義経済学といった工合いである。社会科学は「科学」としてよりも、そのイデオロギー性あるいは「思想性」において存在してきた。これはわが国における政治的風土の帰結に他ならないが、わが国の学者や学生もまた「社会科学」よりもむしろ「社会思想」により多くの関心をよせている事例はいくらでも指摘することができる。もちろん、社会科学にとってイデオロギーは不可欠の要素であるけれども、しかしまたイデオロギーが「科学」たりえないこともまた明らかである。したがって「科学」ぬきの「社会科学」は、「手から口へ」の生活を送っているものと言うべきであろう。

もっとも、「手から口へ」ということでは、社会科学を実用的な目的にしたがわせる事例を第一に挙げるべきかも知れない。経済学にしる法律学にしる、それらのうちの技術的知識の部分は「科学」から切り離されて用いられる。前の場合との関連でいえば、この場合も広い意味での「実践」との即自的な結びつきが図られるわけであるが、政治とのつながりが科学の「非日常的」使用法であるのくらべると、この場合は科学の「日常的」な使用法である。戦前に存在した諸種の専門学校のうち法律や商業を専門とした学校は、いずれも「日常的」な意味での社会科学の普及に努めたものであり、多数の専門的職業人を養成して社会の中堅に送りこんできたわけである。

こうして、わが国の社会科学は政治や思想(イデオロギー)や実務といった「科学外的」条件の圧倒的な影響のもとにおかれてきたし、現在もまたその状況は根本的に変化してはいない。このことは、一見隆盛を示しているわが国の社会科学の世界において、一体いかなる理論をわが国独自の研究成果としてもっているかを問うとき、明らかとなる。われわれは確かに数おおくの優秀で著名な社会科学上の著作を擁している。それらはわが国についての研究というよりも、むしろ欧米の社会や思想の研究である。しかし、それらを通じていかな

る理論上の発見や発明があったかを問うとき、多くの場合そこに見られるのは著名な外国の社会科学者の業績の紹介や解釈であることが多い。実は本稿もその一例をなすものだが、結局、ウェーバーやマルクス、あるいはケインズなどの理論の解説や解釈でなければ、せいぜいその適用の仕方をいくらか変える、あるいはそれらの理論を組み合わせてみるといったことに尽きるといっては極論であろうか。

もちろん、ウェーバーやマルクスを越えられないからといって恥入る必要はない。越えられないのは、われわれに限ったわけではなく、およそ何百年に一人というような偉大な理論家がそうざらにいるわけではないからである。したがって、ウェーバーやマルクスの解釈や適用を競うことでいいわけだが、しかしわれわれの独自の貢献として何物かをつけ加えたとするならば、それは何であったかを「科学」の問題として明らかにする必要がある。ウェーバーやマルクスを援用して当面する現代の政治や社会にたいして一定のイデオロギー的な立場を表明すること、それが実践の観点から見ていかに重要であろうとも、「科学」はそのことによって一歩たりとも前進するものではない。「科学」は科学的実践のなかでしか前進しないものであること、そのことをわが国の社会学者はもっと深く自覚すべきではないか。われわれの社会科学観はどこか手軽すぎるところがあるのではないか。そのためには社会科学の「科学性」とは何か、それはいかにして保証されるのかを問うことから改めて出発する必要があると思われる。本稿はそうした試みの一つである。

II

フォセールによると、社会科学は「文学の児として生まれ、いまは数学の助力を求めつつある」けれども、現在のところ「天気予報」程度の確かさしかもたないと言われる¹⁾。「天気予報」は自然科学の一環である気象学を応用したものであろうから、この評価はもしかすると社会科学にたいして好意的でありす

1) フォセール『資本主義の将来』河野・服部訳 p. 3.

ぎるかも知れない。

経済学や法律学は「科学」の名に値いしないのではないかという疑いは、古くから存在する。フランスでは自然科学を「正確科学」(science exacte)と呼び、それ以外を「人間科学」と呼んでいるが、そうだとすると「人間科学」は「不正確科学」であり、「科学ならざる科学」という意味をもちうるであろう。

「非科学」かどうかは別として、社会科学は自然科学と異なるものだという認識は社会科学者自身によっても語られてきた。「自然科学」にたいする「精神科学」「文化科学」あるいは「歴史科学」という定義の仕方、「法則定立科学」にたいする「個性記述科学」または「了解の科学」などの区別立てがこれである。

しかし、こういう区別立てとは無関係に、自己の理論の科学性を信じて疑わない社会科学者ももちろん存在した。「古典経済学」の名前で総称される理論家たちは、むしろ自然科学的方法をそのまま人間や社会に適用することによって、「新たな科学」が生まれることに素朴な信頼をよせた。『フランス百科全書』の編集者ディドロは「政治算術」のなかに人間統治のための確実な基礎を見出したし、ケネーは経済界を支配する普遍的な法則の存在を信じた。アダム・スミスの有名な『国富論』の冒頭の一句、「あらゆる国民の年々の労働は、その国民が年々に消費する一切の生活必需品および便宜品を本源的に供給する資源である」という認識のなかには、経済活動は客観的なプロセスとして対象的に把えられるという確信が含まれている。

古典経済学のこうした確信は、現代の「近代経済学」にまでひきつがれていると見られる。「近代経済学」は数学に模して自己を示すことを通じて、「正確科学」としての評価ないしは位置づけを要求している。もちろん、社会現象のなかで量的な測定の対象となりうるものは限られており、したがって「近代経済学」の成果が正確なものでありうる局面や条件は限定されているけれども、しかしテクノロジーの発展とともに一方では量化現象が強力に進められると同時に、他方では計量や測定や予見の技術や装置が発展をとげる結果とし

で、計量経済学的な技術や処理方法の有効性が一層増大することもまた否定できないものと思われる。

ただ、問題は古典経済学いらいの経済現象にたいする原子論的で、経験主義的な取扱い、その総括としての「経済理論」にどこまで「科学性」を認めることができるかという点にある。この点について参照すべき第一のものは、マルクスがあたえた評価である。周知のようにマルクスは、古典経済学についてそれらもつ概念の非歴史性を批判したけれども、しかしかれが古典経済学を「俗流経済学」から区別したことが示すように、古典経済学の諸著作に一定の「科学性」を認めていたことは明らかである。

では、マルクスはいかなる理由にもとづいて古典経済学の「科学性」を認めたのであろうか。この点について、現代のマルクス主義哲学者たるアルチュセールは、二つの点を指摘する。その一つは、古典経済学の著者たちが目に見える経済上の諸現象や「経験的・実践的諸概念」（例えば、利子・利潤など）をひとまずカッコに入れて、諸現象の隠された内的本質を明らかにしようとする態度である。つまり、現象を本質に還元しようとする態度である。第二点は、個々の現象を本質に還元するばかりでなく、対象の全体を包括する体系的な理論をうち立てたことであり、それはとくにケネーおよびリカードにおいて顕著である（スミスでは現象と「本質」の混合が見られる²⁾）。

もしも、古典経済学の「科学性」についてのマルクスの以上の指摘を正当であると認めるとすれば、経済学におけるマルクスの科学的な貢献は一体どこに存在するのであろうか。アルチュセールが真に提出した問題は、まさしくこの点であった。マルクスは、スミスさらにはリカードが対象としたのと同じ問題を、ケネーやリカードと同じ科学的手続きを用いて探求し、ただ古典経済学者たちの欠陥や弱点を修正し、かれらの解きえなかった問題を解き、新たな知見をつけ加えたのにとどまるのであろうか。もし、そうだとすれば『資本論』は

2) Louis Althusser, Etienne Balibar, Roger Estabiet, *Lire le Capital*, 1967, T. II, p. 23 et suiv.

古典経済学の完成形態ということになるだろうし、マルクスは歴史意識をもったリカード、あるいはリカード・プラス・歴史意識がマルクスということになるだろう。

これらの仮定にたいする回答は、もちろん否である。マルクスが開拓した科学の新たな地平、それは「歴史科学」の地平に他ならないが、その不可欠の一環をなすものとして、かれの経済理論＝資本主義分析がある。その場合におけるマルクスの経済学は、決して古典経済学の継承ではなく、古典派の問題設定と方法をうけつぐものではない。しかし、そのことをマルクスは自覚的に明瞭に語ってはいない。むしろ、かれはこの点について沈黙をまもっており、自己のなしたげた理論上の革命を解説するよりは、むしろ「資本主義的生産様式」という対象の分析を通じて古典経済学との決定的な相違点を読者にわからせるというやり方をとっている。

マルクスが沈黙しているまさにその場所において、マルクスの議論を読み取らなければならないとするのが、アルチュセールのいう「徴候的読み方」³⁾である。では、われわれはマルクス経済学の独自性をいかに読み取ることができるのであろうか。アルチュセールによると、科学論・認識論の上でのマルクスの独自性は、『経済学批判』において少しく触れられているように、「現実的なもの」réel と「思惟されたもの」pensée との厳格な区別であり、両者を混同したり、一方を他方に還元したりすることを認めないことである。もちろん、唯物論者マルクスは、思惟に先立ち、思惟から独立したものとしての現実の優位性を認める。しかし、同時にかれは現実とは別個の次元において成立する「現実についての思惟」「現実についての概念」を承認する。認識のプロセス、つまり思惟が直観や表象を認識に作り上げるプロセスは、すべて思惟の次元で遂行されるのであって、現実のプロセスとは別個のことがらなのである。

一見したところ単純きわまる思惟と現実とのこの区別は、マルクスを古典経済学からも、ヘーゲルからも分つものである。古典経済学もヘーゲル主義も、

3) *Ibid.*, p. 27.

思惟と現実との混同におち入り、一方は思惟を現実のなかに還元し（経験主義的観念論）他方は現実を思惟のなかに還元する（思弁的観念論）。アルチュセールは、「現実を思惟の所産として考える」ヘーゲルの歴史観もまた、根本的には経験主義的な「時間論」に立脚していることを主張するが、その点は一応別として現実あるいは存在のレベルと思惟のレベルの明確な区別、さらに思惟のレベルにおける固有の営みとしての人間の認識活動、この二つの要素が確保されて始めて「科学」への道が開かれることを力説する⁴⁾。

マルクスは「生きた全体」たる人口、民族、国家などから出発する重商主義の理論家たちの方法と、「単純な観念」たる労働、分業、貨幣、価値などから出発する古典経済学者の方法とを比較しつつ、「一見したところ現実や具体から始めるのがよい方法であるかのようなものである……しかし些細に眺めるとそれは誤りであることがわかる」と述べて、単純な抽象から出発して、「思惟の具体性」において現実の認識をつくり出す方法が「明らかに科学的に正確な方法」であるとしている⁵⁾。

このマルクスの指摘はきわめて重要であるが、同時にまたあまりにも簡単である。マルクスは出発点における抽象あるいは抽象概念を重視する。しかし、その抽象あるいは抽象化の内容は何であるか、なぜそれが「科学的に正確な方法」たりうるのかについては、沈黙して語らない。抽象は常に正しいわけでもなく、また最初の抽象が認識過程で不変のままにとどまるわけでもないであろうが、そうした性質の問題についてマルクスは結局述べておわった。

しかし、周知のようにマルクスは『資本論』に結実する自己の科学的実践を通じて、経済問題の「科学的」取扱いはいかなるものであるべきかを示している。それをいかに読み取るかが問題である。この点についてのアルチュセールの見解を手短かに紹介しておこう⁶⁾。

まず第一に、マルクス主義の認識論では科学的認識なるものは、現実によっ

4) *Ibid.*, p. 29.

5) マルクス『経済学批判序説』参照。

6) Louis Althusser et autres, *op. cit.*, p. 161 et suiv.

て經驗的に与えられるもの(与件)の受動的で制限された反映ではなくて、生産活動と同じく能動的な実践であり、思惟の領域における「生産」そのものである。

第二に、マルクスが経済学の領域に持ちこんだ革命的変化は、『資本論』への序文でエンゲルスが述べているように、化学にあてえたラボワジエの貢献に匹敵するものであり、古典経済学の理論的基礎、理論上の問題設定を変化させ、古い問題設定にかえて新たな問題設定をもたらしたところにある。マルクスによる「剰余価値」の概念は、そうした意義を担うものであって、それは用語の問題でもなければ、「事実」を知っていたか否かという問題でもなく、理論体系そのものの変革の帰結なのである。

第三に、科学の進歩は「認識の対象」——それは「現実的对象」とは別個のものである——を変革することによってえられる。その変革は連続的・漸進的にも行なわれうるけれども、マルクスがそうであったように対象(認識の対象)の構造そのものを変えることによっても行なわれる。

第四に、では経済学の対象、ひいては『資本論』の対象は何であると考えべきであろうか。われわれが常識的に考えつくのは、経済学の対象は現実存在としての経済であり、『資本論』の対象は資本主義社会であるということだが、しかしこうした回答は以上述べたところによって、あらかじめ排除されている。なぜなら、すでに見たように「認識の対象」は「現実的对象」——たとえば日本経済とかイギリス社会など——とは別個のものだからである。

マルクスの「経済学」——いわゆる政治経済学——にたいする批判は、まさしくかれ以前の経済学が経済学の対象を「絶対的所与」としての「経済的事実」であるとして疑わない点を衝くことにあった。経済学にとって、対象は決して「所与のもの」ではない。それは多かれ少なかれ、意識的に作られる(もちろん思考過程で)ものである。アルチュセールはいう。『『経済学批判』がわれわれのいう意味〔古典経済学にたいする異議申立て〕をもっているとしても、その批判は同時に対象についての文字どおりの概念の構築でなければならない。

古典経済学はその対象をその言い立てる、想像上のもののなかに見たわけだが——ここで言う構築は新たな対象についての概念を作り出すものであり、マルクスはそれを〔古典〕経済学にたいして対置するのである。〕⁷⁾

この点をいま少しくふえんしておく、古典経済学あるいは一般にブルジョア経済学が自己の対象をとらえるそのとらえ方は、「経済的」事実や現象が「等質的な場」のなかにばらまかれており、それらは本質的に計量可能であり、したがって常に「量」として把握されるということが第一点である。第二点は、この経済現象の等質的な場は、欲望の主体としての「人間」界との一定の関係を内包する（たとえば「経済人」の観念）。むしろ、ある種の現象が「経済的」でありうるのは、欲望の主体たる人間がそれを賦与するからである。したがって、そこにはすべては人間の欲望にもとづくという「イデオロギーの人間学」が前提されていることになる。

マルクスによる対象の把え方は、以上とはまったく異質的である。つづめて言えば、それはまず第一に対象を質的な「構造」としてとらえ（たとえば不変資本・可変資本、第一部門と第二部門）、しかもその経済的構造は「最終審的決定力」をもつとはいえ、社会総体の一つの次元、領域あるいは水準でしかない。さらに、そうした対象においては具体的な所与の諸個人が「経済」の主体なのでは決してなく、逆に諸個人が客観的な経済構造によって作られる。したがって、主体は経済構造なのである。

ここまでくれば、アルチュセールが『資本論』の対象として指摘するものが何であるかは、もはや明らかであろう。つまり、それは「生産様式」の概念である。「生産様式」が「生産関係」と「生産力」という二つの関係を統合したものであることは、改めて述べるまでもない。マルクス経済学の「科学性」は、まさにこうした問題設定と対象把握のなかに存することとなる。

III

7) *Ibid.*, p. 129.

社会科学の「科学性」は、自然科学の「科学性」とは異質のものではなからうか、という印象ないしは感覚は、周知のようにほぼ19世紀の半ばという時点において、主としてドイツを地盤として発生し、普及したものである。その印象あるいは感覚は、一方では自然科学にたいして「人間科学」あるいは「文化科学」を確立したいという正当な要求にうらづけられていたものの、他方では自然科学のもつ客観性や正確性、普遍性に対抗して主観性やあいまいさの強調に傾き、特殊性や地域性や歴史性を評価し、そのことを通じて主観主義や神秘主義への道を用意するものであった。

経済学の問題として考えると、19世紀ドイツの思想界は、イギリスやフランスで前世紀までに構築された古典経済学、その立場や結論をいかにしてのり越えるかを自己の課題とした。それを知るためには、フィヒテ、ヘーゲル、マルクス、F・リストなどの名前を挙げるだけで十分であろう。古典経済学が肯定した「分業」「競争」「価値」などの概念、およびそれらが前提とした唯物主義、客観主義、個人主義、普遍法則、楽観主義などがドイツ的知性につよいしげきをあたえたことは明らかである。このドイツ的反応から、どのような経過と手続きを経て「社会科学」が結実してきたかを追求し解明すること、これが、すでに述べてきたアルチュセールのマルクス論の狙いであった。

アルチュセールの場合、マルクスをドイツの状況から切り離すこと、言いかえると「若きマルクス」以後にマルクスの哲学的・認識論的深化を読みとることで問題は解決される。つまり、マルクスの思惟過程における「切断」を読みとるのである。言うまでもなく、その最大の産物は『資本論』であった。したがって『資本論』は二重の課題を果したもものとして読みとられる。つまり、一方では古典経済学にたいする批判あるいは反抗というドイツの反応をどう受けとめるかという問題と、他方では古典経済学そのもの「科学性」をどう評価するかという問題である。『資本論』の出現は、この錯雑した問題状況にたいする哲学的であると同時に科学的な解答の提示であった。その点についてのアルチュセールの見解というか結論を要約しておこう。それによると、この二重の

課題と見えるものは実は一つであり、古典経済学にとっての方法的前提であった経験主義はドイツ哲学のなかでもまた変わることなく継承され、カント、フイヒテなどの古典哲学においてはもちろん、フォイエルバッハ、ヘーゲルもまたその依拠する哲学的前提は経験主義に他ならない。したがって、アルチュセールがマルクスにおいて見出した事態は、この経験主義の地平、経験主義的「科学」観が始めて『資本論』によって越えられたということであり、それが「マルクスによる偉大な理論上の革命」⁸⁾の成果なのである。

この古典経済学とドイツ哲学、とくにヘーゲル主義との同一視は、おそらく唐突の感じを読者にあたえずにはおかないだろう。なお慎重な考察が不可欠であることは改めて述べるまでもない。とくにヘーゲルとの関係では「弁証法」が中核的な問題を構成すること、周知のとおりであるが、そのことは一応別としよう⁹⁾。われわれはマルクスの経済学が以上のような理由およびその他の理由によって「科学性」を獲得したことをひとまず認めるとしよう。他方また、マルクスとほぼ同時代を起点として、のちに「歴史学派」と総称されることとなる研究動向が、これまたドイツを中心として生まれることも周知のことにぞくする。その後、この「歴史主義的思考」が社会科学の発展にとって無視することのできない重みをもちつづけたことも、ひとの知るところであろう¹⁰⁾。

いわゆる社会科学の一環としての「経済史」研究は、多かれ少なかれすでに述べたドイツ的状况とくに「歴史学派」的潮流の産物であった。経済史研究は、単に社会科学の一つの専門分野として開拓されたものではなくて、古典経済学によって代表される「経済理論」の抽象性、合理主義、コスモポリタンの性格にたいする抗議や批判の意味をこめて成立したものであった。19世紀の知性を特徴づける歴史への関心は、明らかにフランス革命が代表した抽象的普遍への反動であった。そしてその反動は全く根拠のないものではなかった。なぜなら、

8) *Ibid.*, p. 161.

9) ヘーゲルの歴史観については *Ibid.*, p. 38 et suiv. なおアルチュセール『甦るマルクス』河野・田村訳, II, 「唯物弁証法について」参照。

10) 古典経済学と歴史学派との方法上の対立の問題を「自然主義」と「歴史主義」の対立として解明した業績として、出口勇蔵『経済学と歴史意識』が参照されるべきである。

19世紀社会の現実がフランス革命の理念が結局空想にとどまるか、あるいはブルジョアジーという一階級のみ利益をあたえるものでしかないことを暴露したからである¹¹⁾。「歴史主義」はいわば「普遍的革命」意識の挫折の表現であった。抽象性と普遍性にたいする具体性と個別性（あるいは特殊性）、合理性と客観性にたいする非合理性と主体性、分析と推論にたいする直観と総合など、「歴史」への探究は従来の経済理論に欠如していたこれらの要因や要素をもちこむことによって、社会科学の深化と革新をはかったのである。

しかしながら、具体物への関心や実証性の尊重が社会科学に新たな要素をもちこむにいたったことは認められるとしても、そのことはいわゆる「経済史」研究を「科学」たらしめるものであったかどうか。「経済史」は「経済理論」の補完物、補助的手段にすぎず、それ自体独立の「科学」たりえないのではないか、こうした疑問を避けて通ることはできなかった。もし、この問いに肯定的な答えが出されるとすれば、「経済史」研究はいかなる理由で「科学」たりうるかが示されなければならない。この点について、経済史家の多くはそれほど神経質ではない。おそらくそれは「経済史」や「経済学史」がすでに大学の講座制度のなかに確実に組みこまれてしまっているからであろう。

しかし、社会科学の「科学性」を改めて問おうとするわれわれの関心からすると、経済史研究が「科学」たりうるための条件は何であるかを明らかにする必要がある。だが、この点について事態は一層困難である。それは当の経済史家の多くがむしろ経験主義の立場から歴史研究をとらえることを当然としているからである。例えば大著『権力の座について大ブルジョアジー』¹²⁾で知られるジャン・ロムは経済学と経済史のかかわりについて、両者の関係を「永遠の弁証法」と呼ぶ。「こうして永遠の弁証法が出現する。つまり、経済上の概念は歴史から出発して構築される（またそれによらずしては構築されえない）。それは歴史によって検証される（また、そうであるほかにない）。歴史は経済理論の到

11) 拙稿「1848年と社会主義」、岩波講座『世界歴史』19巻所収、参照。

12) ジャン・ロム『権力の座について大ブルジョアジー』木崎喜代治訳。

13) Jean Lhomme, *Économie et histoire*, 1967, p. 33.

達点をなすのと同時に出発点をなすものである。¹⁴⁾同様にまた、経済史も経済理論から借用した概念を出発点とすることなしには構築されえないし、経済理論の援けを借りることなしにはその検証もまた不可能である、と述べている。

こうした見方は、全体として今日の通説をなしている。つまり、それは経済理論と経済史の相違をひとまず認めた上で、両者の相互補完性、協力関係を説く主張である。もちろん、相互補完的な関係が事実上存在することに異論を唱える必要は決してないけれども、しかしこの種の主張は前に述べた経験主義的な歴史観そのものであることを忘れてはならない。経験主義的な歴史観によれば、歴史(学)は一時的、特殊的、相対的、具体的な「諸事実」の認識であって、そうした認識は抽象的で普遍的な概念にもとづく「理論的」認識とは別個のものだということになる。過去における具体的で特殊な事実が、歴史家の主要な関心のまとであるとするなら、その対象はもちろん短期的な、たえず変動するものであって、長期的・永続的なものではない。ジャン・ロムによると現代の多くの歴史家は、以上の理由によって、短期的な変化や変動に関心をもつと言われる。だが、それにたいして、W. W. ロストウだけは反対に理論家は短期的な仮定のなかで仕事をするが、歴史家の仕事の領域はこの反対に人口・技術・制度などの長期変動に他ならないという説であると紹介している¹⁴⁾。この指摘はきわめて興味ぶかい¹⁵⁾。

もちろん、ここでロストウ説に立入る余裕はわれわれにはない。しかし、『経済成長の諸段階』の著者が「歴史」を長期変動の解明として扱っていることは納得できる。ただし、「理論」と「歴史」との相違点を長期・短期という時間の長さで区別することは、依然として経験主義的な態度であることをまぬがれない。連続的、量的、あるいは自然科学的な「時間観」は、質的な切断や層化を内包する時間認識とは合致しない。社会科学の「時間」概念は、まさし

14) W. W. Rostow, "The Interrelation of Theory and Economic History", *The Journal of Economic history*, Vol. XVII, No. 4, December 1957. この興味ある論点については別の機会に論及したい。

15) *Ibid.*, p. 14.

く切断や重層性をもつ構造連関として把えられるべきものである。この点は、ヘーゲルの時間観に関連して、アルチュセールがするどく指摘したところである。

経済史研究の「科学性」は、したがって以上の通説とは別個の根拠をもつものでなければならない。経済史あるいは歴史学の「科学性」は、経済理論あるいは経済学の「科学性」とまったく同じものであり、ただ設定される対象の規模の違いがあるだけとする説がある。それがアルチュセール、バリバルなどの立場である。この点についてのアルチュセールの直截な主張を聞こう。歴史学の対象は何かという問題について、かれはこう答える。

「固有の意味での歴史〔学〕の対象は、あたかもこの歴史という言葉が何の造作もなくその概念の意味をになっているかのように、歴史のなかで（この同語反覆的定義！）生起するものではなく、まったく反対に歴史〔学〕の対象はその特殊な規定性における歴史概念そのものである。歴史〔学〕の対象は、歴史的探究それ自体を通じて行われる歴史概念の生産、構築である。理論分野としての歴史〔学〕の対象は、歴史的実存の変種についての種差的決定の概念、特定の歴史的実存の種差性についての概念の生産であり、その種差性とは一定の生産様式に由来する特定の社会構成の構造とプロセスの実存以外の何者でもない。したがって科学としての歴史〔学〕の対象は、同じタイプの理論的実存を保持するものであり、マルクスによる経済学の対象と同一の理論次元に樹立される。『資本論』をその一例とする経済学の理論と、科学としての歴史理論とのあいだで指摘することのできる唯一の差異は、つぎの点にかかわる。つまり、経済学の理論は社会総体（totalité sociale）の相対的に自立的な一部分だけを考えるが、これにたいして歴史理論は原理的にいって複合的な総体をそうしたものとして、対象として受取る。この差異を別とすれば、経済科学と歴史科学のあいだには、理論的観点からみて、いかなる差異もない。」¹⁶⁾

以上の引用文においてすべてが語られている。すなわち、経済理論は特定の

16) Louis Althusser, *op. cit.*, p. 59.

生産様式およびそれに基礎をおく流通・交換・分配の構造把握を目指すものであるのにたいして、歴史学は社会を一つの全体構造として把握し確定する。したがって両者は対象の拡がりの上での相違点をもつけれども、「科学性」の上ではまったく同一のものであり、一方が抽象的、他方が具体的分析、一方が論理構造で他方が現実そのものの解明という工合に方法と対象の上での差異をもつものではない。両者いずれも社会科学としての「科学性」を共通にしているのである。

この極めて明快で、かつ野心的なアルチュセールの主張を大筋において肯定するとすれば、経済学は結局「歴史科学」としての社会科学に含まれる一分科だということになるだろう。しかし、なお問題は残る。その一つは、いわゆる「歴史科学」における経済史の位置づけの問題である。この点では、二つの関連を考える必要がある。第一は経済理論と経済史との関連であり、第二は歴史学と経済史とのかかわりである。前者については、つぎのように言うことができる。経済理論が対象とするのは特定の生産様式とそれに対応する経済的諸関係の構造であるが、経済史の対象は種々の生産様式およびそれらに対応する経済的諸関係の複合体の構造であり、またそれら構成体の移行過程のメカニズムである。経済史はしたがって経済理論に吸収されるものではなく、それを包含せざるをえないけれども、特定の経済理論の領域とは別個の、それ以外の対象および問題を取扱うこととなる。実際、たとえば封建制（封建的生産様式）と資本主義との同時存在の問題および前者から後者への移行にかかわる問題などは、経済理論の解きえないことがらであり、しかもそれらを解明することなしには、現実あるいは実践への接近はありえないのである。

後者の問題、すなわち歴史学と経済史とのかかわりについていえば、上記のように歴史学が社会総体の認識であるのにたいして、経済史は総体のなかの独自の次元としての経済構造の認識である。経済構造は特定の生産様式＝社会構造のもとで規定的・優越的な作用を他の諸次元たる政治やイデオロギーにたいして及ぼすとはいえず、他の諸次元を自己に吸収・還元することはありえないば

かりでなく、場合によっては他の諸次元の側からの規定的で優越的な作用を受けとられることもある。例えば、原始社会における家族・親族関係の優位、封建社会における宗教的イデオロギーの役割などについて一考すればそのことは明瞭である。社会の客観的基礎と社会の構成原理とは別個のことがらであり、総じてそうした諸構造の「組み合わせ」あるいは関係を追求することが科学としての歴史学の課題であるはずである。

IV

社会科学を含む広い意味での「人文科学」は、発生的にはその「科学性」の根拠を自然科学のやり方を模倣することのなかに求めてきた。数学や力学や生物学が発生し発展するにつれて、それらの方法を人間や社会に適用して何らかの法則を見出すと同時に、対策を立てるのがこれらの「学問」の役割であった。しかし、人間や社会に適用された自然科学的方法は、自然科学と同じような正確さと精密さをあたえるものではなかった。なぜなら、人間も社会も不断に変化するものであり、数学的な処理や機械的な操作によっては、容易にその存在の秘密を開示するものではなかったからである。したがって、偶然性や主観性にたいして多くの余地を残すこととなる人文科学はその「科学性」を常に疑われ、何度となく否定されてきた。人文科学が「歴史」を安住の地として見出して以後も、「歴史は科学たりうるか」という疑問が常に提出されたことも周知のところである。

すでに見たように、マルクスは人文科学が長いあいだ抱きつづけてきた問題を社会科学の領域に移しかえることによって、それを科学として定立することに始めて成功した。しかし、マルクス自身は自己の科学上の発見について明らかに語っておらず、ただ『資本論』という知的生産物を「生産」する実践のなかで事実上それを示したにすぎない。アルチュセールの仕事の独自性は、そのマルクスの「科学上の発見」を、場合によっては、マルクス自身の言明に反しさえしながら、「読みとる」ことであった。それが『資本論を読む』こと

であった。

本稿の最初で述べた感想に立ち帰るとすれば、われわれは社会科学の「科学性」をあまりに安易なものに考えてきたことが指摘される。社会科学の「科学性」は「実践」によって決められるとか、マルクスの著作や言葉であればすべて「科学的」で、マルクス以外はすべて「非科学的」で「俗流」であるとか、あるいはマルクス主義をヒューマンイズムの潮流のなかに流し込んで科学をイデオロギーの別名にしてしまうとか、基準も論理も根拠も乏しい科学論議が横行してきたといってよい。そうした状況のなかで社会科学の「科学性」は一体どこにあるのかという問題提起は、少なくとも問われるべき課題に向って正当に問いかけを試みたものであり、その意味するところは少なくないとは私は考える。以上、アルチュセールの所説を紹介することをおかねて私自身の読みとり方の一端をしるした。読者の検討を願いたいと思う。

あとがき——本稿は既発表の拙稿「現代マルクス主義の二つの立場」(『思想』1968年5月)、「歴史認識の科学性」(『思想』1971年8月)の続編である。あわせて検討願えれば有難い。